

# 小栗上野介情報85

ホームページ<http://tozenji.cside.com/> Eメール: [tozenji@clock.ocn.ne.jp](mailto:tozenji@clock.ocn.ne.jp)



2023(令和5)年4月  
発行:東善寺 住職 村上泰賢  
群馬県高崎市倉渕町権田169  
〒370-3401  
Tel・fax:027-378-2230  
〒振替00120-1-406206東善寺



今年は非命155年(156回忌)です

〈予報〉

ペリー来航(1853)から170年

## 小栗 まつり

主催 小栗上野介顕彰会 5月21日(日)  
共催 東善寺



◆講師 若林 悠ゆう 氏  
同志社大学卒。風刺画の全盛期である黒船来航から第二次世界大戦までの浮世絵や国内外の雑誌を調べ、そこから見えてくる庶民感情を中心とした歴史について研究。

著書 「風刺画が描いたJAPAN 世界が見た近代日本(国書刊行会)」「風刺画とアネクドットが描いたロシア革命(監修・桑野隆 現代書館)」「風刺画とジョークが描いたヒトラーの帝国(監修・芝健介 現代書館)」ほか。

式典 挨拶・祝辞 **午前 10時**～ 倉渕小学校体育館で

講演 風刺画研究家 若林 悠ゆう ◇入場無料

### 「風刺画から見た幕末維新」

墓前祭 **午後 1時30分**～ 東善寺境内で  
墓参 読経・献香 どなたもお参りできます

演奏会 群馬マンドリン楽団

昼市 **午前11時**～ 境内で **たのしい店、おいしい店がたくさん**  
・軽い昼食もとれます。

◆講師若林悠氏は、近刊の編著『風刺画が描いたJAPAN\*世界が見た近代日本』(国書刊行会)で、浮世絵師河鍋暁斎かわなべきょうさいが明治維新直後に描いた「大津之連中睡眠の図」にみられる人物は小栗上野介としている。  
・どういう視点でそう読み解くのか  
・他の風刺画から何が読み解けるのかなど、幕末維新のあれこれを風刺画を通して語っていただきます。



### ■小栗上野介記念館情報 スタンドグラスの制作構想 進行中

◆スタンドグラスアーティストのヨージ・ウチヤマ氏はある小栗ファンの委嘱を受けて、小栗記念館に設置する作品三つの制作構想を進行中です。

◆「遣米使節のワシントン海軍造船所見学」「造船所のフランス人首長ヴェルニー(左画像)」「横須賀明細一覧図」の3枚をスタンドグラスにする構想で、3月には細かに区割りした色ガラスをはめこむ彩色設計下図がほぼ出来上がったとして、持参しました。

◆ヨージ・ウチヤマ氏はフランスで技術を磨き、その高度かつ精緻な技術で表現するスタンドグラスで知られる、新進の作家です。

◆東善寺にウチヤマ氏から寄進されたダルマ像(右画像)はやはりスタンドグラスで、なんと立体型のもの。よく見ると極めて細かな色ガラスがはめ込まれていることがわかり、驚嘆させられます。



### 遣米使節パネル展

◆5月1日～末日  
東善寺で

・163年前、サムライたちはアメリカで何を見、経験したかー  
・使節の見聞を生かした近代化を阻んだ「不毛の攘夷運動」...

<https://www.yojiuchiyama.com>



◀ Yoroi

◆豊国とよくに神社(名古屋)にはウチヤマ氏の「ヨロイ姿の武士」立体作品が奉納されています。



# 日本近代化にブレーキをかけた 不毛の攘夷運動-1

◆**攘夷**…中華思想で自分の国は文化の進んだ開明の国、周囲は未開野蛮な国「東夷とらい・西戎せいじゅう・南蛮なんばん・北狄ほくてき」と低く見て、外国人を打ち払い懲らしめるとする考え。日本では外国に門戸を閉ざす「鎖国」とセットで捉えられていた。中国がアヘン戦争でイギリスに敗れ香港を租借されたこと、幕末に外国船がしきりに日本近海に現れたことから、危機感を抱いた日本で国を守るという視点から急激に広まった。

◆**尊王論**…すると守るべき国とはどのようなものか、その基本を「臣下の実力者による摂関政治」でなく「天皇親政が行われた」醍醐天皇と村上天皇の時代を理想として、「天皇親政」をめざす尊王論が説かれるようになった。

◆しかしこの考えは、中国神話で二人の皇帝「堯ぎょう」と「舜しん」が理想の政治を行った王として儒学で評価されているから、日本なら誰だと調べて二人の天皇に当てはめただけの話である（実際に二人が善政を行なったわけではなく、臣下に実力者がいなかっただけと言われる）。しかも父子相統をする日本の天皇制と違って、神話での堯はその帝位を息子に譲らず臣下の舜に譲り、舜もやはり優秀な臣下の「禹」に譲っている（禪譲という）。



▲襲われる外国人 清水一衛画

その決定的な違いに目をつぶって、ともかく「天皇親政」を目標にすると、いま邪魔になるのが幕府だから尊王=倒幕論となり、外国の敵を討つ攘夷=鎖国という思考が強まった結果、尊王攘夷=倒幕鎖国を目ざすことが日本を守り天皇親政を実現する道、として単純に熱狂する若者が増えた。

◆問題は尊王攘夷を掲げれば少しくらいのやり過ぎは「尊王の大義」の前には許される、とする独りよがりの過激な行動に走る若者が、少しの意見の違いでも許さず相手を殺害するテロ行動に走ってしまったこと。また攘夷をめざすあまり、仕事や公務で日本に滞在する外国人を理由もなく殺害し、或いは開国交易で国を豊かにして近代化しようとする開国派の日本人を襲った。

◆あえて「不毛」としたのは、幕府から政権を受け渡された薩長新政府は、明治以後は「攘夷」の看板などすっかり引っ込め、平気で外国と交際し、鹿鳴館に象徴される西洋化を進めた。攘夷など討幕のための空念仏のスローガンに過ぎなかったとわかる。最大の公約違反といえる。（つづく）

## 情報あれこれ

### ◆小説・門井慶喜「ゆうびんの父」

昨年暮れから群馬県の上毛新聞で前島密ひそかを描く連載小説が始まった。いずれ越後高田から江戸に出て倉石典太が学んだ安積良斎塾に入門するストーリーになろうが、良斎が江戸で最初に開いた塾は神田駿河台の小栗忠高（小栗忠順の父・のち新潟奉行）屋敷の長屋であり、のちに良斎が将軍に拝謁するときは忠高が江戸城内の案内役であった。やはり良斎塾で学んだ忠順の後輩になる。のちに権田村から会津に逃れた道子夫人から生まれた忠順の遺児国子が、会津から東京に戻って明治20年に結婚するに際し、前島密が仲人をしている。忠順が遣米使節から帰国後に今の郵便制度のハシリとなる「書信館」制度の創設を唱えたことも関連していよう。

### ◆ワシントン・ダレス空港で奇跡の出会い

ワシントンダレス空港のたまたま入った売店で、いきなり「私の先祖はオオイソジウロウよ」と言い出した女店員さん。7年前の話をはっきり記録しておきます。

以下のHP東善寺からどうぞ。

<http://tozenzi.cside.com/aroundw-washington.html>



### ◇幕末の歴史・小栗上野介ファンの方へ

倉淵町の小栗上野介顕彰会ではさまざまな顕彰活動をしています。地域の人口減で顕彰会員が減っています。東善寺の「たつなみ会」会員には顕彰会機関誌『たつなみ』を発行のつど顕彰会から購入して会員にお送りし、誌代が顕彰会の活動に役立っています。また東善寺発行のプリント版「小栗上野介情報」や「東善寺だより」などで、小栗上野介・幕末関連の最新情報をお送ります。

### 会員になってください——東善寺「たつなみ会」

□たつなみ会会費 年1800円 お申込み：東善寺へメールまたは電話、ハガキで

## JICA (国際協力機構) の新作DVD

### 『横須賀・横浜・川崎から見た

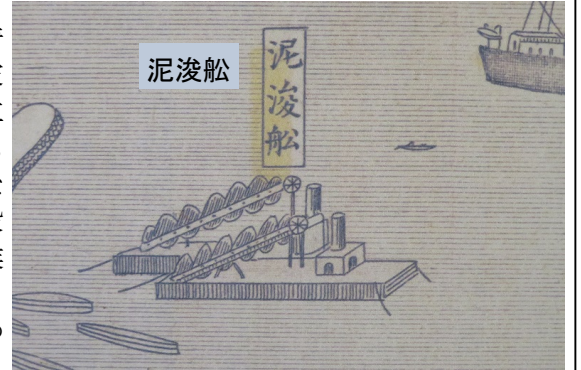
### 東京湾の170年』がすごい

「ラストサムライ小栗忠順の志を継いで浅野総一郎らは東京湾に大型船着岸波止場を建設した…いまの京浜工業地帯」

ストーリー

◆日本の政府開発援助（ODA）を一元的に行う実施機関として、開発途上国への国際協力を行っているJICA が、共同テレビ社に発注・制作したDVD「横須賀・横浜・川崎から見た東京湾の170年」が完成。

◆東京湾は遠浅のため、沖に停泊させた大型貨物船から舳はしけによって荷物の積み下ろしをしているのは能率・経費から適切でない。浅野総一郎（浅野セメント）は大型船が直接着岸して作業が出来る波止場を浚渫と埋め立て、それに「石も土も石灰石も国内でまかなえるセメント」で建設を決意。そんな大事業は国がやることだ、という反対に「国のためになることを国ができないなら自分がやる。この身



▲明治16年「横須賀港明細一覽図」

が終っても、将来役立つ仕事をしておく。国家百年の計」と邁進。◆その言葉の原点に、横須賀造船所建設を提議・推進したラストサムライ小栗忠順の「幕府は終わっても、日本は続く」「土蔵付き売家になればいい」と語った志があった、というストーリーが展開。

JICA横浜センターでは海外からの港湾技術研修生教育の教材として制作。2023年はペリー来航から170年なので、幕末明治の港湾技術の歴史を紐解く内容とした、という。

◆DVDは、東善寺で見られます。またJICA-NetライブラリのYou-Tubeチャンネルで公開の予定（開始時期は未定→HP東善寺「新着情報」でお知らせします）。



右北岡伸一理事長▲

◆JICA北岡伸一理事長は2021令和3年12月17日に、高崎分室設置の挨拶で山本一太知事や富岡賢治高崎市長との面談前の忙しい時間に、わざわざ東善寺に参拝、小栗公の墓前に線香を手向けています。

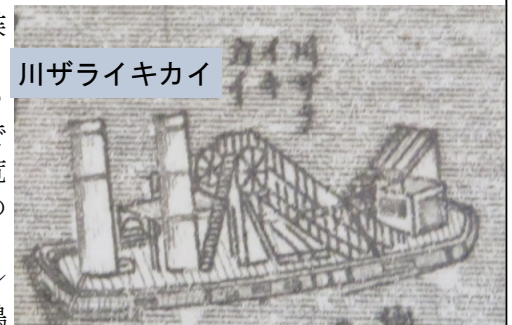
### 【横須賀明細一覽図を読む】

深い港湾維持に地味だけれど大事な仕事

### 「浚渫 しゅんせつ」

日本で機械による浚渫（大型船航行のため港湾の底土を浚さう作業）が行われたのは横須賀港が最初であろう。「横須賀港一覽図」には明治12年からその様子が描かれている。

浅野総一郎（浅野セメント）が東京湾の川崎-鶴見-横浜間に大型船の着岸可能な波止場を建設をする時、はじめ英国から輸入した浚渫船で作業を開始したが、英国と日本の土質の違いがあつて、機械に何度も改良を重ねる苦心があつたという。



▲明治12年「横須賀港明細一覽図」